



昨年公表された全国学力学習状況調査結果において、高知県の大変厳しい状況が明らかとなりました。「教員の授業力向上」「組織全体で共通理解のうえにたった取組」「家庭学習の定着と授業とのサイクル化」など、これからの学校の取り組むべき方向も明らかになり、その課題解決のためにまったなしの取組と成果が求められています。今回は学力問題と社会教育の関係について私なりに考えてみました。

私が社会教育にかかわって数年来、学力問題は学校教育だけで容易に解決できる問題ではない、という私自身の感覚が年々肥大化しています。土佐の教育改革の検証の過程でも「これまでどちらかというと学校教育にシフトを置いた取組が中心であったが、これからは教育的風土づくりのために学校教育と社会教育の両輪で取り組んでいかなければならない。」との見解も明確に示されました。

この課題解決に向けて、社会教育・生涯学習、あるいは家庭教育や地域教育の側から積極的にアプローチをかけることによって、効果を得ることはできないだろうか？我が町の教育風土をつくりあげるために具体的な取組をどうするか？まさしく学校教育と社会教育の両輪で取り組む必要をひしひしと感じながら机に向かっている現在です。



一言に教育的風土づくりといっても簡単にそれが形成されるような安易な社会状況でもありませんが、すぐに効果が表れないからといってすぐに取組を変更したり休止したりするのもどうでしょう。先日ある講師の方が次のようにおっしゃっていたのが大変印象に残りました。

「教育的風土づくりは伝統づくりと人づくり 継続した教育・啓発を！」

効果はすぐには表れないけれど、地道な取組を継続することによって家庭や地域に教育・啓発の機会を与え続けることが大切である、ということを繰り返し力説されていました。これを具体的に取り組んでいるいくつかの市町村では、家庭教育講演会を学校や教育委員会のスタッフだけでなく、保育所・幼稚園・小学校・中学校の各PTAや地域住民と一緒に実行委員会を立ち上げ、意見交換し現状を捉え、講師を選定するなど、我が町の教育的風土を形成するために長年活動しています。また、伝統が情性にならないように新しいスタッフの意見を積極的に取り入れたり、会の形式を講演会形式・ワークショップ形式・シンポジウム形式・懇談会形式などにするなど、様々なニーズに応じた形式あるいはテーマで実施しています。これを聞いて私が感じたこと、これは今までも言い古された言葉ですが、

「保護者や地域住民が本気で参画すること」

この働きこそこれからのキーワードだと改めて実感しました。本気の参画とは、参加者が当事者意識を持って子どものために本気でかかわることです。学校教育ではよく「開かれた学校」と言われますが、家庭教育や地域教育の範疇でいえば「開かれた行政」に関してはまだまだ取り組む余地はあるのではないかと感じています。



地域の大人にかかわっていただくことで単なるイベントを消化していくのではなく、学習機会を提供し教育的風土を広げていく。子どもが現在在学していない方についてもそれまでの経験や知恵をお借りし参画していただく。このような取組が広がっていくことは学力向上だけではなく、子どもの虐待やいじめ問題などの解決のきっかけになっていくことも可能ではないでしょうか。

「学校の先生・行政・保護者・地域がぐっすりつながっていったら厳しい社会でも子どもはよくなる。現状維持どころか力が上がっていかあや。」そんな声が挙がる社会教育側からのアプローチ、もっと進めていきましょうや！